

「もとはこちら」のお話し

No.67 今月のテーマ 泣いた花嫁の父



善事をなせば、 そのこと自体が 最高のほうび

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

北原ゆり筆

ある新聞に出ていた話です。

投稿主は、姪の結婚式に招待されて出席したという女性です。

新婦の父親は投稿者の義理の弟に当たり、十五年前に二人の小学生の子を持つ女性と結婚しました。そして大切にいつくしんで育てたその娘が成長し、この度めでたく結婚する事になったのです。

さて式が始まり、投稿者は、父親が花嫁をエスコートするものとはばかり思っていたのですが、意に反して実際に花嫁をエスコートしてきたのは、花嫁の弟だったそうです。花嫁の父はいつになく酒盃を重ね、そして何度も席を中座していたそうです。

投稿主は、花嫁の父である義弟の心中を思い、憤りを隠しきれないようでした。実はその弟夫婦には結婚後新たに二人の子供が生まれていました。四人の子供の父親となった彼は、子供達を分け隔てなく平等に可愛がり、一生懸命に働き、家庭や子供達を大切に育ててきたそうです。

ですから花嫁となった娘は、たとえ父親が血の繋がりのない親であっても、子供として育ててもらった事に対し感謝し、恩義に報いるべきではないかと考え、新聞の読者の意見を聞きたいと思って投稿したとの事でした。鬱憤やる方ないという感じでした。

さて平井先生の勉強会では、時にはこのような問題をひとつのテーマとして採りあげ、自分ならばどう考え、どう行動するだろうかという様な事が話し合われました。そしてそういう勉強をする日は、先生がただ一方的にお話しをされるのではなく、夫々の会員が自分の思うところを順番に述べていくというやり方で会は進められました。

勿論全員が全員、正しい方向の答え方ができるわけではありませんでしたので、先生は苦笑しながらもそれらの答えを否定することなく最後まで聞かれ、意見や考えが出揃った後でそれらをまとめ、より幸せになる為のものの考え方や生き方という事について、即ち「もとはこちら」という自然の法則についてお話し下さいました。

撰理のままの人生

さて今回の花嫁の父の話ですが、こういう時、先生は常に多角的にお話しをされたものです。どういう事かといいますと、例えば人生相談などを受けられた時などもそうですが、質問者が誰なのか、どういう立場の人なのかという事によって、答え方が違っているという事です。

今回の例で言うならば、義理の娘を育てながら報いられず、寂しい思いをした父親に対してのアドバイスと、義理の父親に育てられ花嫁となった娘に対しての言葉は、異なっているという事です。またこの投稿者である女性に向かって言う言葉も、当然違ってくる筈です。

しかし先生の教えは常に一貫し、迷いや揺るぎのないものでした。生きる立場、置かれた状況は一人ひとり皆夫々に違っているけれども、誰にとっても共通して言える事は、全てが「もとはこちら」であり、良い事であれ悪い事であれ、自分の人生の中で起きて来るすべての事の原因は、それを体験したその人の中に必ずあるという事です。

父親には、父親自身の中にそういう事を体験をしなければならぬ何らかの理由が必ずあり、娘にはまたそういう経験をしなければならぬ原因が、娘自身の中にあつたのであり、そして投稿者には、またそういう事を見聞きしなければならぬ何らかの原因や理由があつたという事です。

見るも因縁、聞くも因縁という言葉がありますが、ある事を見聞きするだけでも、それにはそれなりの原因や理由があるのです。そしてその原因や理由ば、それはその事を体験した当事者の中にあるという事です。

ものごとというものは、全て自然の撰理通りに起きて来て、そしてまた自然の撰理通りに消えて行くものなのです。

私達の人生を平等に貫いているそういう自然の撰理の存在に気付く、今回の経験を教訓として生かし、自然の撰理に沿った考え方、生き方をする様に努めていけば、誰でも必ず向上し、浄化が進み、より一層幸せになつていく事ができるのです。

夫々の立場

ではまず父親です。

この父親は自分としては、結婚後新しく生まれた我が子同様、二人の義理の子供に対しても分け隔てする事なく接し、可愛がって育ててきたつもりでした。それなのに父親として認めてもらえず、また結婚式では感謝の言葉の一つも掛けてもらえなかつた事に対し、非常に寂しく思っています。その事については人間ならば誰でも理解できる、当然の感情であると思います。

ですが、彼がより向上し幸せになる為にあえて言わせてもらうならば、育てた相手から感謝もされず、また父親として認められない事を寂しく思うというその心の裏には、いったい何があるのかという事です。

彼は自分でも気付かないうちに、自分は義理の父親であるにも関わらず、よく頑張つてこの子達を育てたという想いがあり、その事に対し、評価されたいという気持ちやどこかに潜んでいたのではないかという事です。或いは、これまでの多くの苦勞も、娘からの感謝のひと言葉でもあれば、それで十分報われるのに、という様な思いが、どこかになかつたかという事です。

結婚式の場で、度々中座したり、いつも以上に酒盃を重ね、寂しさを紛らわさなければならなかつたという事も、元はといえ、自分のそういう満たされたい想いが、寂しさとなって表われているのではないかという事です。

純粹に子供の健やかな成長だけを望み、また何の見返りも報酬も求めず、実の親に代わって自分が育てさせて頂くという純粹な心でずっと接していたならば、そういう類の寂しさは感じなかつたはずで。

評価されたい、感謝されたい、報われたいという気持ちが満たされず、その想いが彼の心を惨めなものにしているのです。それはいわゆる花嫁の父が感じる一般的な寂しさとは全然種類の異なる寂しさの筈であり、いわば彼は自己憐憫の状態にあつたのです。



義理の父親である自分を、ないがしろにされた、認めてもらえないなどと寂しく思ったり、ヤケ酒などを飲むなどというのは、本当はとても恥ずかしい事です。しかし一般的には彼のそういう気持ちに分かるだけに、周囲としても慰めようがなく、困ってしまうのです。

そして結果的には、娘の結婚式という大切な場をしらけたものにしてしまい、父親としての自分自身の不出来さ加減を、大勢の人の前にさらけ出す結果になってしまったのです。

多分、他の出席者もぎこちなさや居心地の悪さを感じていたと思います。厳しく言えば、その原因を作ったのは父親である自分自身である事に気付き、また、そういう娘に育ててしまった事に対し、お詫びをするくらいの気持ちが必要ですよ。

親というのは子供を育てるなかで、自らが成長すると言われます。親は子供によって育てられるのです。ですからこの義理の父親も、子ども達によって知らず知らずのうちに、随分育てられた筈です。

まして義理の関係にあるならば、通常の親子関係以上に複雑な感情の交錯があり、そういう生活の中で、より高度な魂の学習が行なわれていた筈です。

喜びや苦勞を感じながら、彼はそれまでの子育ての中で十分な報酬を既に受け取り、成長させてもらっているのです。

ですから娘からの感謝の言葉などを期待するよりも先に、むしろ自分の方から、「こんな素晴らしい子育てという事をさせてくれて有り難う」「立派に育ってくれて有り難う」と、お礼をいうくらいの気持ちがあつて良いのです。

通常は自分の子だけで精一杯のところを、他人の子を引き取り育てるといふ事は、一段階も二段階もレベルの高い人にしか出来ない大事業で、言わば彼は選ばれた人だといふ事が出来ます。

もしも彼がそういう自覚のもとで普段から生活をしていたならば、心はもつと穏やかで、娘との関係もまた違ったものになっていた可能性は十分にあります。

そしてもしかしたら美しい花嫁姿となつたわが子を前にして、通

常の花嫁の父以上の感慨や喜びを味わうことが出来たかもしれないのです。

自分で選ぶ、自分の人生

では次に、娘の場合です。

どういふ事情があつての事かは分かりませんが、自分は義理の父親に育てられる事になつたのです。そして母親が再婚してから生まれた二人の弟妹と共に、曲がりなりにもここまで育ててもらつたわけです。

自分から見れば、義理の父親は受け入れがたい存在で、本当は母親に再婚などして貰いたくなかつたかも知れません。しかし現実に母親は再婚し、その再婚相手と共に一つの家族として幼い自分を育ててくれたのです。精神的にも経済的にも本当に数え切れない恩恵を受け取つたはずですよ。

血のつながつた実の親子であつてさえ、親にとつての子育てといふのは本当に真剣で、命を張つての大変な仕事です。

楽しい事も勿論多々ありますが、例えば子供が病気などになれば、自分は食わず寝ずで、子供の看病に当たるのです。いつも子供の事を思い、幸福を願い、子供の将来を案じ続け、祈りながら毎日を過ごしているのです。

ましてそれが血のつながりのない親子ともなれば、普通の親以上の計り知れない苦勞があつた筈です。たまたま義理の関係にあるばかりに、思わぬわだかまりが生じ、ギクシヤクする事や行き違いが起きて悩む事もあつたでしょう。

同じ未熟な人間同士でありながら大人の方が子供を気遣い、讓歩する場合も多々あつた筈です。

そういう数え切れない程の苦勞を重ねながら、それでも他人の子供を育て続ける親といふのは、実は、血のつながつた親以上に縁の深い関係にあるのです。余程の事がなければ、両者がそういう関係になることはありません。

その父親に対し、感情的な好き嫌いは別として、子供として感謝



もできないというのでは、あまりにもお粗末であり、未発達です。

結婚できるほどに成長したとは言っても、心はまだまだ幼い子供
のままであり、それでは到底一人前の大人とは言えません。

お互い未熟な人間同士でありながら、縁あって育ててくれたその
親に感謝もできず、衆人の前で寂しい思いをさせるなど、本来あつ
てはならない事です。そういう事だから、結果として自分の結婚式
に出席してくれた全員の前で、娘は自分の未熟さを披露するという
事になってしまふのです。

父親を寂しがらせ、出席者に居心地の悪さや不快な思いをさせた
その原因は、ひとえに娘である自分の未熟さにあるという事を娘は
しっかりと自覚し、強く反省する必要があります。

反省し、お詫びをするという事は、口先ですみませんと謝るとい
う事ではなく、自分のものの考え方、生き方を変えろという事です。

こういう複雑な家庭環境の中で育つということが、自分の魂の成
長には必要であつたと考え、物事を善意に受け取る訓練を、何ごと
にも感謝をするという訓練を、自分で自分に課す事です。

そして縁あつて親となつた人を恨んだり、憎んだり、不足不満を
言うのではなく、自分にはそういう環境の中だからこそ学べる事が
あり、それを学ぶ必要があつたからこそ、こういう運命を無意識の
自分が選んだのだと考えるのです。それが自然の摂理に基づく正し
いものの考え方であり、もとはこちらという事です。

同じことでも、感謝もできれば、不足や不満を並べ立て、愚痴や
不平で自分の人生を汚して行く事もできます。どちらが幸せな人生
かは一目瞭然です。

愚痴よりは感謝を、不平不満よりは喜びを見出す訓練をするので
す。

感謝は、自分の人生に明かりを灯す最高の行為であり、また感謝
の心は自分の人生だけでなく、相手の人生をも明るく灯すのです。

体験した事の中から如何に感謝を見出すか、それはこの新婦だけ
ではなく、私達全てに課せられた人生の大きな課題です。感謝心が
高まれば高まるほどに、幸せはどんどんと寄って来るからです。

相手の中に自分を見る

常に相手の立場に立つて、物事を考える訓練をする事です。

相手の立場など、とても考えられないという人は、その立場を経
験する為にまた生まれ変わってから、そういう人生を生きて実地に
学ぶ事になります。

そして次々と立場を入れ替え、作用と反作用の法則に基づき、か
つて自分のした事を今度はされながら人生を何度か、何度もやり直
し、色々な人生を経験していく中で、人間として何が正しいか、何
が間違っているのかを学んでいく事になるのです。

私達はそういう人生を共に歩んでいる仲間同士です。

目の前にいる人の姿は、かつての自分自身の姿であり、或いは将
来の自分の姿であるかもしれません。自分に関係のない他人等とい
う人は、どこにもおりません。全ての人が、もう一人の自分です。
自分の魂の浄化向上、そして成長の為にその必要があれば、今度は
自分がその人の立場に立つのです。

「自分がした事を、人からされ、された事を、またして返す」とい
う形で、誰でも人生のバランスを取りながら生きています。

人生全てが学び合いの場であり、赦し合いの場であり、生かし合
いの場なのです。

今日は人の身、明日は我が身です。



【案内】

次回の勉強会は、八月十一日(土)を予定しています。
勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。

編集発行人 もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com

073・461・6300